生徒たちの仕事は、尿や便の片づけや水や食事の世話、ウジ虫を取り除くこと。
いそがしく、休む暇もありません。
朝や夕方には、米軍の攻撃がやむ短い時間がありました。
そのときは、井戸で水をくんだり、炊事場にご飯を取りにいったり、
死体を運び出したりする、命がけの作業に追われました。

初めのころ、生徒たちは、
病院は安全な場所だと思っていました。
しかし、次第に生徒にも犠牲者が出始めます。

汚れた服や頭にはシラミがわき、青白くやせ細っていき、
高熱で倒れる生徒も出てきました。
こうして、生徒たちは、少しずつ戦場の恐ろしさを思い知らされていったのです。

陸軍病院に動員されたひめゆりの生徒と、
その教師240人のうち、136人が亡くなりました。
1945年6月18日の「解散命令」までに18人、
「解散命令」の後に118人が死亡しました。

ここは、沖縄戦で亡くなった生徒と、
その教師のための「鎮魂」という部屋。
壁にかけられた写真と名前が、
ひとりひとりがたしかに生きていたことを、
伝えています。

ひめゆりの沖縄戦

解説＝ひめゆり平和祈念資料館

この絵本は、沖縄県糸満市にある「ひめゆりの塔」を訪れた今の生徒が、ひめゆりの生徒たちが見た沖縄戦を追体験するお話です。**ひめゆりの塔は、第二次世界大戦で大きな犠牲者を出した壕（洞くつ）の上に立っています。隣にある「ひめゆり平和祈念資料館」には、10代の生徒たちが体験した戦争の実態を学ぶために、全国の中学生や高校生を中心に、毎年40万人が訪れています［p2-3］。**

1945年3月に始まった沖縄戦では、**日本とアメリカの軍隊が戦い、たくさんの沖縄の人がまきこまれて命を落としました［p6-7］。**日本軍は大人だけでなく、男子生徒を兵隊にして、女子生徒に看護の手伝いをさせました。

「ひめゆり」とよばれた2つの学校（沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校）からも女子生徒222人、教師18人の合わせて240人が日本軍の病院に動員され［p4-5］、そのうち136人が亡くなりました。戦後、この人たちを「ひめゆり学徒隊」とよぶようになりました。

生徒たちが病院に着くと、病院は空襲を避けるために、壕の中に移っていました［p8-9］。それまで生徒たちは、病院は戦場から離れた安全な場所にあって、爆弾は飛んでこないと思っていました。でも、実際は爆弾が飛んできて、とても危険でした。

壕の中は大けがをした兵士のうめき声やどなり声がひびき、血やうみ、排せつ物のにおいでいっぱいでした。**生徒たちは、患者の世話や治療の手伝い、水くみや食事運び、汚物の片づけ、伝令（連絡を伝えること）、亡くなった人をうめる仕事などを行いました［p10-11］。**

野田貞雄校長を囲む沖縄師範学校女子部の生徒たち。

2か月が経ったころ、アメリカ軍は首里にあった日本軍の司令部にせまりました。日本軍の兵力は10万人から3万人に減っていましたが、降伏（負けをみとめること）せずに、日本本土で戦う準備をする時間をかせぐため、南部にある摩文仁へと移動しました。**陸軍病院も南部に向かうことになり、生徒たちはけがをした友だちを担架で運びました［p12-13］。**

南部にたどりつくと、まだ爆弾が落ちていない家や緑の木々がありました。**病院のスタッフや生徒たちは6つの壕に分かれて隠れていました［p14-15］。**6月14日から18日の間に、3つの壕がアメリカ軍の攻撃を受けました。

6月18日の夜、アメリカ軍がいよいよ近づいてきたとき、**生徒たちに解散の命令が出されました。小さなグループに分かれて壕を出ていくことになったのです［p16-17］。**生徒たちは、どこに行けばいいかわからないまま、**安全な場所を求めて逃げまどい、次々と命を落としていきました［p18-19］。**